

中央に東柱を持つ弥生時代にはない新式の形態で、面積も二四〇二九平方メートルと広い。遺物でも二軒の住居から鉄鍬が出土し、畿内系・山陰系・瀬戸内系などの外来系の土器が数多くみられ、全体としては「優勢な家族の住居にかかる集落」と考えられている。

一方、このような堅穴住居跡からなる一般集落とは別に、地域の支配者である豪族の居館も発見されている。大分県日田市小迫辻原遺跡は日田盆地北部の台地に所在し、弥生時代終末から古墳時代初頭の環濠集落が三か所台地の西部に形成されている。豪族の居館はこの台地の中央部から東部にかけて三基が確認されている(第55図)。時期は環濠集落とほぼ並行する古墳時代初頭で、三基ともほぼ正方形の溝によって囲まれている。規模は、1号居館が約四八メートル、2号居館が約三九メートル、3号居館が約二〇メートルである。このうち2号居館は濠が幅三メートル前後で、北辺の一部に出入り口が設けられている。環濠の内側に小溝が一条方形にめぐり、更にその内部には倉庫と考えられる三×二間の総柱建物が南北に二棟並んで建てられていた。

二 北部九州の豪族と中期の古墳

記紀の豪族

古墳時代中期になると、大和政権の支配下に入った各地の豪族は「あがたぬし 県主」の身分を与えられる。「日本書紀」の景行紀・仲哀紀・神功紀などには、豊前国では長峽・上膳、豊後国では直入、筑前国ではな 儺・伊都・おか 岡、筑後国では八女・水沼・山門などの「あがたぬし 県」の名称がみえる。大和政権が各地の豪族を服属させていく様子は、景行天皇十二年の条にも記されている。この時期、豊国の縁辺部に

本拠地を持つ土着の首長層（宇佐の駅館川上流の鼻垂、上毛・下毛の山国川上流の耳垂、田河の彦山川上流の麻剝、紫川上流の土折・猪折）が畿内の大王に従わなかったことから、景行天皇は豊国の中央部に置かれた長峽県に行宮を建て、討伐していったといわれている。

また『豊後国風土記』では、景行天皇が九州に巡幸する際に随行した菟名手は仲津郡中臣村で瑞兆をみて、それを天皇に報告した。天皇は喜び、菟名手に「天の瑞物、地の豊草なり、汝が治むる国は、豊国と謂ふべし」と述べ、豊国直の姓を賜った。この菟名手が豊国の国造の祖といわれている。

中期の主要古墳

この時期の主要古墳には、豊前国では苅田町御所山古墳（全長一一八メートル）、筑前国では福岡市老司古墳（全長約七六メートル）・同市鋤先古墳（全長六二メートル）・穂波町山ノ神古墳（全長約八〇メートル）、筑後国では吉井町月の岡古墳（全長約八〇メートル）・同町塚堂古墳（全長九一メートル）・久留米市石櫃山古墳（復原全長一〇〇メートル以上）・広川町石人山古墳（全長約一二〇メートル）などの前方後円墳がある。このうち、老司古墳は五世紀初頭の時期で、3号石室はごく初期的な横穴式石室（竪穴系横口式石室）が採用されている。この石室は竪穴式石室の一方の短側壁上位に開口部を設ける型式である。月の岡古墳は筑後川の中流域に位置する五世紀前半の古墳で、内部主体の竪穴式石室内には長持形石棺が置かれ、甲冑八領・刀剣・馬具などとともに垂飾付き帯金具が副葬されていた。石人山古墳は内部の石棺が妻入りの横口式家形石棺で、棺蓋外面を中心に直弧文などが浮き彫りされている。五世紀前半代に属し、九州最古の装飾古墳である。

石室の変化

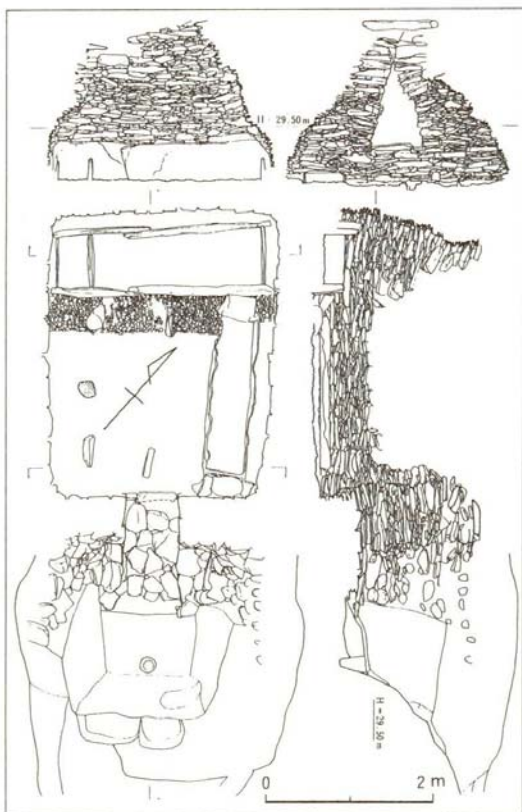
大型の「畿内型」前方後円墳などの内部主体には、棺を安置する空間として竪穴式石室が用いられている場合が多い。この竪穴式石室の起源は弥生時代の墳丘墓に求めることができ、

第4章 古墳時代

世紀初頭の時期には、石室も新しい構造のものが導入された。佐賀県浜玉町谷口古墳は全長約九〇メートルの前方後円墳であり、後円部に合掌式天井構造を持つ竪穴式石室が二基存在し、石室の前方部側に横口と羨道が確認された。この石室が最古の竪穴系横口式石室と認めら

弥生時代後期終末の岡山県真備町黒宮^{まび}大塚では長さ二・二メートル・幅〇・九メートルの石室が主体部となっている。古墳時代に入ると竪穴式石室は「畿内型」前方後円墳を象徴する埋葬主体として全国に波及し、その規模も大きくなり、長大な割竹形木棺を納めるようになる。そして、棺の内外には武器、武具、工具、装身具、宝器など数多くの器具が副葬されるようになる。ただし、これらの古墳は前期の段階では大和政権の連合に参加した首長個人のための墳墓であり、当然内部の竪穴式石室も首長一人を埋葬するものであった。

五世紀には中国や朝鮮半島との交流が深まり、新しい技術や文化が倭国にもたらされた。四世紀末から五



第56図 福岡市鋤先古墳石室実測図
(柳沢一男氏原図)

れている。石室内には仿製三角縁神獸鏡四面・碧玉製腕飾り一一点のほか鏡三面・刀剣・玉類などが副葬され、四世紀末ごろの築造と考えられている。このほか、福岡市鋤先古墳の石室(第56図)も初期段階の竪穴系横口式石室であり、築造時期は五世紀初頭ごろと考えられている。床面は長さ三・四^{メートル}、幅二・五^{メートル}を内側に強く持ち送りながら小口積みし、石室と外部の羨道の間には一枚石を立てて閉塞している。このように、竪穴系横口式石室の特徴は、竪穴式石室の短辺の一方に開口部と通路を設けることにより、一石室内に複数の埋葬が可能になったことである。また、その起源は朝鮮半島中部のピョンヤンの四世紀中ごろの古墳にさかのぼることができると思われる。下って南部のソウル周辺の古墳にも採用されているという。

五世紀後半代にはこの型式の石室は北部九州各地の首長墓に取り入れられる。構造も石室の最下部の壁石が大きくなり、羨道の両側壁に大形の立石を使用するなど、全体として堅固な作りになっていく。六世紀初頭には、羨道がしだいに長くなり、横穴式石室に変化していく。更に六世紀中ごろになると玄室の手前前面を設ける、複室構造の横穴式石室が現れ、石室の長大化が一層進むことになる。

三 後期・終末期の北部九州

在地豪族の変容

五世紀代に直轄地として設置された「県」を拠り所とする豪族は、大和政権内の地方官である「県主」として、在地首長の権限を認められていた。その後六世紀代には、新し